

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 15 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24593427

研究課題名(和文)ヘルスリテラシーとソーシャル・キャピタルが高齢者の介護予防に与える影響の解明

研究課題名(英文)The impact of health literacy and social capital on the preventive care for elderly

研究代表者

鈴木 圭子(SUZUKI, KEIKO)

秋田大学・医学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：10341736

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：地域在住高齢者のヘルスリテラシー(HL)と活動能力の関連を質問紙調査結果から分析した。活動能力に強く関連した要因は、男性では、機能的HL、ソーシャルネットワーク、批判的HL、保健行動であり、女性では、保健行動、機能的HL、相互作用のHL、ソーシャルネットワークだった。機能的HLは年代が上がると共に低下する傾向にあったが、相互作用のHLと批判的HLは、80歳代までは年代が上がっても低下はなかった。高齢者のヘルスリテラシーを考慮することは、活動能力の保持に有用であることが示唆された。ソーシャルキャピタルは、ソーシャルネットワークとの関連があり、ネットワークを介しての身体活動への影響が考えられた。

研究成果の概要(英文)：To identify the factors that might be related to elderlys' ability to perform the activities of daily living, questionnaire surveys of residents were conducted. The results revealed that health literacy, social network, and health behavior were related to the ability of the elderly to perform the activities of daily living. Although functional health literacy skills declined with aging, no decline was observed in communicative health literacy or critical health literacy skills in the elderly up to their 80s. Social capital was related to the social network and appeared to affect physical activities through the social network.

研究分野：高齢者看護学

キーワード：高齢者 介護予防 質問紙調査 活動能力 ヘルスリテラシー

1. 研究開始当初の背景

我が国の高齢者人口割合は増加し続けており、健康寿命の延伸が課題となっている。個人が健康に関する情報を適切に入手し、自らの状況に応じて利用することは、健康の維持・増進に有用である。個人が自分の健康を主体的に管理し、保健医療におけるさまざまな意思決定に積極的に関わることが求められるようになる中、健康や医療に関する情報を収集、理解し、活用する力として、ヘルスリテラシーという概念が提唱されている。ヘルスリテラシーとは、健康増進・維持に必要な情報にアクセスし、理解し、利用していくための個人の意欲や能力とされる (WHO)。一方、ソーシャルキャピタルとは人々の信頼関係、互酬と呼ばれる相互扶助、人的ネットワークといった、人々の協力関係を促進し、社会を円滑に機能させる諸要素の集合体であり、健康との関連が報告され始めている。

ADL 障害や高次生活機能低下の予知因子として多くの報告があり、関連の強い要因として、身体機能、栄養状態、心理・社会機能に大別されるが、ヘルスリテラシーやソーシャルキャピタルに関し、我が国の高齢者を対象とした研究報告は限られている。本研究では、高齢者の健康増進と介護予防に資することを目的に、ヘルスリテラシー、ソーシャルキャピタルと活動能力の関連を検討した。

2. 研究の目的

1) 地域在住高齢者におけるヘルスリテラシー、ソーシャルキャピタルを含めた生活状況と活動能力の関連を、質問紙調査から明らかにする。

2) 一般成人及び地域在住高齢者における認知的ソーシャルキャピタルと心身の健康の関連を明らかにする。

3) 地域在住高齢者が健康教育参加を継続する要因を質的研究より検討する。

3. 研究の方法

1) 地域在住高齢者におけるヘルスリテラシー、ソーシャルキャピタルを含めた生活状況と活動能力の関連

北東北に位置する A 町の協力を得て、同町在住の 65 歳以上の住民のうち、要支援・要介護認定を受けていない高齢者 1156 名を対象に郵送法による質問紙調査を行った (回収率 68.3%)。回答者は男性 41.7%、女性 58.3%、回答者の平均年齢は、 76.5 ± 5.4 歳だった。調査内容は、(1)属性(性別、年齢、婚姻状況、同居家族、教育歴、職業)、(2)健康状態(心身の自覚的健康度、通院頻度、既往歴)、(3)老研式活動能力指標 (range:0-13, 手段的自立・知的能動性・社会的役割より構成)、(4)経済状態、(5)保健行動、(6)過去 1 年間のネガティブイベント、(7)ソーシャルネットワーク (日本語版 Lubben Social Network Scale 短縮版¹⁾, range:0-30)、(8)ヘルスリテラシー、(9)認知的ソーシャルキャピタルとした。

(5)保健行動は、深田ら (2012)²⁾の地域高齢者における保健行動に関連した自己制御尺度を参考に、日常の保健行動 11 項目について 4 件法で尋ねた。(8)ヘルスリテラシーは、Ishikawa et al. (2008)³⁾に基づき、相互作用のヘルスリテラシー、批判的ヘルスリテラシー、機能的ヘルスリテラシーの項目を用いた。(9)認知的ソーシャルキャピタルは、地域の安全、美観、人々への信頼、互助、所属感に関し、それぞれ、「そう思う (5)」～「そう思わない (1)」の 5 件法で回答を求めた。

分析方法: (1)属性別の特徴とヘルスリテラシーに関連する要因を明らかにするために、項目間の²⁾検定、及び Mann-Whitney の U 検定、一元配置分散分析 ANOVA 検定を行った。尺度得点は各項目を合計し、それぞれの中央値を基準に、高低により 2 群化した。(2)高齢者の活動能力と諸要因の関連を分析するために、老研式活動能力得点と関連があ

った項目を独立変数、老研式活動能力得点を従属変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）を行った。有意水準は $p < 0.05$ とした。

2) 認知的ソーシャルキャピタルと主観的健康の関連（成人と高齢者の比較）

30～64歳の一般成人を対象に実施した全国規模の調査結果（分析対象数：446）及び1)の調査結果から、それぞれの対象における、認知的ソーシャルキャピタルと主観的健康感の関連を分析した。分析方法は、認知的ソーシャルキャピタルの各項目、ソーシャルネットワーク得点、経済状態、相互作用的健康リテラシー、批判的健康リテラシーを独立変数、主観的健康感を従属変数とした多重ロジスティック回帰分析（変数減少法）とした。これらの2つの調査における分析項目の質問方法は同じであった。

3) 地域高齢者における健康教育への継続参加の要因

A町B地区において、同地区の健康教室に継続して参加している高齢者7名を対象にグループインタビューを行った。調査内容は参加者の健康教室参加までの経緯と、参加を継続できる理由であった。

4. 研究成果

1) 地域在住高齢者を対象とした質問紙調査結果

対象者の老研式活動能力得点は平均 11.3 ± 2.4 点、ソーシャルネットワーク得点（日本語版 Lubben Social Network Scale 短縮版）は 15.4 ± 6.6 点だった。

(1) 属性別の比較

対象者の属性別の特徴は以下のとおりであった。性別では、女性より男性にソーシャルネットワーク得点、社会的役割得点が低かった（いずれも $p < 0.001$ ）。年代別では、活動能力（ $p < 0.001$ ）、保健行動（ $p < 0.001$ ）機能

的 HL（ $p < 0.01$ ）は年代が上がると共に低下していたが、相互作用的健康リテラシーと批判的健康リテラシー、及びソーシャルキャピタルは、80歳代までは年代が上がっても低下しなかった。家族構成別では、独居者に、手段的自立度が高い（ $p < 0.05$ ）、主観的健康感が低い（ $p < 0.05$ ）、過去1年間のネガティブイベントが多い（ $p < 0.01$ ）、朝食の欠食が多かった（ $p < 0.05$ ）、独居・非独居別によるソーシャルネットワーク、保健行動、ヘルスリテラシー、ソーシャルキャピタル得点の有意差はなかった。なお、独居者は13.7%であり、女性に独居割合が多かった（ $p < 0.001$ ）、家族構成別による年齢差はなかった。

(2) 活動能力に関連する要因

年齢を調整した重回帰分析（ステップワイズ法）の結果、活動能力に強く関連していた要因は、男性では、機能的ヘルスリテラシー、ソーシャルネットワーク、批判的健康リテラシー、保健行動であり、女性では、保健行動、機能的ヘルスリテラシー、相互作用的健康リテラシー、ソーシャルネットワークであった。

単変量解析の結果、相互作用的健康リテラシーの高さ、批判的健康リテラシーの高さのいずれにも関連していた項目は、就業（している）、教育歴が長い、健康状態が良い、心の健康状態が良い、医師や看護師に健康状態を相談している、良好な保健行動、ボランティアを時々する、趣味を行っている、今後1年以内に楽しみがある、経済的なゆとりがある、ソーシャルネットワークが大きいことであった。相互作用的健康リテラシーの高さのみに関連していた項目は、聴力に不自由がない、過去1年間の転倒経験がない、であった。相互作用的健康リテラシーには身体的機能の関与が認められた。

高齢者のADL障害や高次生活機能低下の予知因子として多くの報告があるが、本調査結果より、高齢期には機能的ヘルスリテラシ

一の低下は認められるが、相互作用的健康リテラシー、批判的健康リテラシーを考慮することは、高齢者の活動能力の保持に有用であることが示唆された。なお、ソーシャルキャピタルは、ソーシャルネットワークとの関連があり、ネットワークを介しての身体活動への影響が考えられた。

2) ソーシャルキャピタルと主観的健康感の関連

多重ロジスティック回帰分析(変数減少法)の結果、主観的健康感が良くないことに有意に関連していた項目は、30~64歳の成人では、経済状態が良くない(OR=4.49, 95%CI:2.71-4.43)、地域の一員だという実感がなくない(OR=1.84, 95%CI:1.14-2.96)であった。地域在住高齢者では、経済状態が良くない(OR=1.82, 95%CI:1.22-2.73)、地域の一員だという実感がなくない(OR=1.62, 95%CI:0.97-2.70)、相互作用的健康リテラシーが低い(OR=1.56, 95%CI:1.05-2.31)が最終モデルで選択された。経済状態に加え地域の一員であるという所属感は、成人及び地域高齢者のいずれにおいても主観的健康感と関連することが示唆された。また高齢者では、健康感と相互作用的健康リテラシーの関連が示唆された。

3) 地域在住高齢者を対象とした健康教育の実施とグループインタビュー結果

調査対象地において、住民の健康意識向上を目的に、健康づくりに関する出前講座を地区別に実施した。本講座は自治体及び地域の自治組織と連携し行われた。

高齢者が健康教室に参加する背景として、グループインタビューの結果、健康に関する意識が高いこと、知人に誘われるといったきっかけがあることがあり、継続して参加する要因として、活力が得られること、非日常的な体験ができるなどのメリットがあること、

他者とのつながりがあることが挙げられた。

本研究にご協力頂いた皆様に、深く感謝します。

<引用文献>

1) 栗本鮎美, 他 (2011): 日本語版 Lubben Social Network Scale 短縮版 (LSNS-6) の作成と信頼性および妥当性の検討, 日老医誌 48, 149-157

2) 深田順子, 他 (2012): 地域高齢者における保健行動に関連した自己制御尺度の開発, 日本看護科学会誌 32(3), 85-95

3) Hirono Ishikawa et al. (2008) Developing a measure of communicative and critical health literacy: a pilot study of Japanese office workers, Health Promotion International, 23(3), 269-274

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計6件)

Suzuki K: Associations between Communicative and Critical Health Literacy and the Health Behavior. Public Health Conference 2014, July 12th-14th, 2014, Bangkok, Thailand.
Suzuki K and Nagata M: Association between Psychological Distress and Social Capital in Communities and of Workplace. Book of Abstracts of 17th International Nursing Research Conference, Instituto de Salud Carlos Unidad de Investigacion en Cuidados de Salud, Madrid:686,2013
Minaka Nagata, Keiko Suzuki: Factors Associated with the Subjective Sense of Well-being of Patients on Dialysis. 3rd World Academy of

Nursing Science, October 18, 2013,
Seoul, Korea.

鈴木圭子, 永田美奈加: 中高年層における援助希求とメンタルヘルスの関連, 及び性別の特徴. 第33回日本看護科学学会学術集会, 2013年12月6日, 大阪

鈴木圭子: 中高年におけるヘルスリテラシーと生活習慣、主観的健康感、ソーシャル・サポートの関連. 日本看護研究学会第39回学術集会, 2013年8月23日, 秋田

鈴木圭子: 中高年者における地域・職域のソーシャルキャピタルとメンタルヘルスの関連. 第32回日本看護科学学会学術集会, 2012年12月1日, 東京

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 圭子 (SUZUKI KEIKO)

秋田大学・大学院医学系研究科・教授

研究者番号: 10341736

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号:

(4) 研究協力者

荒樋 豊 (ARAHY YUTAKA)

秋田県立大学・生物資源科学部・教授

研究者番号: 20369276

宮田 世紀子 (MIYATA SEKIKO)

秋田県三種町福祉課・地域包括支援センター・課長補佐